
IS～インフィニット・ストラトス～ とあるはみ出し者の物語

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS～インフィニット・ストラatos～ とあるはみ出し者の物語

【Zコード】

N4017N

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

両親と共に飛行機テロに巻き込まれたが、たった一人だけ生還した少年。少年は聰明だった。だから、思った。『弾かれた』と。そして、少年は自らを『世界のはみ出し者』と自称した。というわけで、HDがクラッシュした作者がモチベ回復のために書いた奴です。主人公はISは使いませんが、それなりに強いキャラになると思います。例えるなら、ライダーマン。作者は特オタなので、どこかしこにそれ系のネタがありますので注意してください。

第1話 始まり（前書き）

ありすじもあるとおつのおせなしです。

もちろん、他の小説も少しずつ書いていくので安心してください。

……バックアップはこまめに取ったほうがいいですよ？

第1話 始まり

「父さん。この写真に写っている人って誰？ 父さんに似ているけど」

少年 桂はそう言って自分の父親に一枚の写真を見せた。そこには、自分の父親と顔が似ている男の一人が肩を組んで写っていた。

「ああ……これは兄さんだよ。まあ……もう十年くらい会っていないけどね」

父親はそう言つて写真を懐かしそうに見ていた。桂はまだ小学生ではあるが、両親の血を受け継いでいるのか、勉強も運動も平均以上で聰明な少年だった。だから、父親の言葉に含むものを感じたが、聞くことはしなかった。だが、父親は肩をすくめて話し始めた。

「僕は……そうだねえ。桂なら分かると思うけど、ちょっと特殊な家の出身でね。まあ、特殊部隊を家業にしている家と思ってくれればいい。その宗家の次男坊だったんだ。今、桂に教えている体術とかもその家に伝わるものなんだよ」

「母さんもその家の出身なの？」

母親は生まれつき体が弱いが、元は國家レベルの研究に携わっていたという才女らしい。ならば、母親もその家出身かと思つたが父親は首を振つてその考えを否定した。

「母さんは、僕が家を出てから会つたんだ。丁度、僕が行き倒れそうなときにたすけてくれてね」

何でも、家業を兄弟のどちらが継ぐかで家が二つに割れそうになつたため、兄に置き手紙を残して家を飛び出したのだが、すぐに路銀も尽き果て、ホームレスにならうかといつと間に不良に絡まれていた母親と出會つたらしい。

「まあ、兄さんは怒つているかもね。手紙だけ残して家業をほつぼり出したから。でも、兄さんと争うのは嫌だつたし…丁度兄さんがロシアの特殊部隊隊長の娘さんと結婚しようとしていた時だつたからね。幸せそうな二人を見ていると…ね？」

最初は政略結婚の予定で、自分が兄のどちらかと結婚することになつていたのだが、兄と彼女が仲良くしているのを見て自分がいないほうが余計な波風を立てないと考えたらしい。

「でも、そのおかげで母さんと会えたし、桂という息子を得た」と
ができたんだ。兄さんは悪いけど、僕は今幸せだよ」

兄と連絡を取らないのは、家業を継ぐために共に努力をしてきたのに「兄弟で争いたくない」とこつまじく考へて逃げ出した自分を恥じてのことらしい。

「さて、やるやる僕は仕事に行つてくるよ。桂も、やんわり千冬ちゃんたちが来る頃じゃないかな?」

「うそ。父さん…別に恥じる必要はない」と思つ。やつともじさんもそう思つてゐるはず。

桂の言葉に父親はきょとんとしていたが、じぱりとこつもの優しい笑みを浮かべて桂の頭を撫でた。

「あつがとい。やつだな…こつかは兄さんと会わないといけないな

父親はそう言って仕事に向かつた。桂はその後姿を暫く見ていたが、すぐに自分を迎えて来た幼なじみの一人の少女と共に学校へと向かった。

「桂…どうしたんだ?」

「はつ…まさか、かつちゃんに春が…? 誰だよ… ゆる「そんな訳ない」」

桂が一人とあつたのは小学校の入学式。優秀な両親の影響なのか、すでに大学レベルの知識はあつた桂は、はつきりというなら達観していた。そのため、小学校で浮かれているクラスメイトを一步退いた目線で見ていたのだが、それに気づいて近寄ってきたのがこの二人。ほにやつとした感じの篠ノ之束が言うには、「君は私と同じ感じがする」とのこと。

そこから、凛とした雰囲気の織斑千冬とも仲良くなり、今では結構仲が良い。

「父さんも苦労していたんだなあと思つただけだ」

「健一さんが? ひよつさんのお世話をあるから?」

「いや、そういう訳じゃない。人間、知らないところで苦労しているんだと思つただけだ」

「ふ～ん」

束は他者に対して排他的ではあるが、桂の両親は受け入れていた。特に、母親であるひよりに憧れている部分もある。

「あ、ならかっちやん。今度、ひよりさんに会いに行きたいんだ。ちゅうと、色々聞きたいことがあってさー！」

「ん？ まあ、電話で聞いてからになるともう少しが～」

「オッケー！ ありがとね！」

最近、束は何かに熱中している。千冬も関わっている感じだが、自分には教えてくれない。まあ、女同士の何かしらがあるのだらうと考えていた。

「やうね……」いじめられればいいんじゃないかしら?」

「なるほどー!」

ある休日の病院の一室では桂の母であるひよりと束が何かの設計図を片手に意見交換を行っていた。千冬はひよりにお茶を淹れながら話を聞いている。

「やつ言えば桂はじつたの? 健一さんはお仕事だと想つんだけど」

「かつちやんなら鉛入りのベスト着てランニングに行くなつていってよー!」

最近、夫である健一から色々と話を聞く。自分がかつて所属していた対暗部用暗部『更識』で受けていた教育を桂に施していたのだが、まるでスポンジが水を吸つよつてどんどん自分の物としていった、と。

それを聞いて、ひよりはやはり血が繋がつているものだと思った。

健一は今でこそ優しい好青年であるが、生まれは警察の公安のよつ
な暗部組織のため、身体能力も知識も高かつた。それに、時折寂し
そうな顔をする。それは多分、実家への負い目でもあり、兄への負
い目なのだろう。暗部組織なら健一の居場所をすぐ探せるはずな
だが、見つかっていないのは健一が何らかのツテを使っているから
なのだろう。

「……男って不器用ねえ」

「「？」」

まだ「少女」である一人にはそこいら辺は分からぬのだろう。そう
思いながらひよりは『インフィニット・ストラトス』と銘打たれた
設計図の添削を始めた。

「……剣道じゃないんだね」

「うーん。まあ、基礎を学ぶという意味では剣道もいいんだけどね。それに、これはほどちらかと言えばタイ捨流に近いかな？」

仕事から帰ってきた父親と修行をしていた桂はふと質問してみた。
今は木刀を使っているのだが、剣道などではタブーの足元への攻撃
や、剣道などではありえない目潰しに蹴撃や拳撃などを使っている。

「『剣』のみに限定するのは及第点と教えられたんだ。まあ、極め
れば関係ないかも知れないけどね」

「ふーん。まあ、言いたいことは分かるよ」

要するに剣は手段の一つなのだろう。まあ、それは暗部組織とか傭
兵なら当然と思い桂は父親との修行を再開した。

そして、翌年にひよりの体調が回復したため家族旅行に行くことに
なった。最初は束が自分も行きたいとこねていたが、千冬に殴られ

て氣絶していた。

「桂。おみやげを頼む。出来れば、一夏も食べられるような

「一夏…ああ、あのちびっ子か」

一回だけだが、千冬の弟を見たことがある。ただドギッシい女難の相
が出ていたのは気になつたが。

「ああ。頼めるか?」

「大丈夫だ。任せておけって」

束にも土産を買つてくると約束して、桂は両親と共に旅行に出かけた。田的池はヨーロッパらしい。空港で見送った二人はどんなお土産を買つてくるのかがすぐ楽しみだった。

「でも、よく考えるとかつむちゃんのセンスって……」

「そう言えばそうだったな」

家に帰つた二人は、桂のセンスが悪いことを思い出したのだ。

例えば、台所に現れる『G』を凄い生き物と思っていたり。いや、実際に凄い生き物ではあるのだが、ありがたがるのはご遠慮願いたい。

「まあ……ひよりさんもいるし大丈夫だろ？ 健一さんは……分からないけど」

「あ……」

ぶつちやけ健一も同様にセンスがない。よく温泉街の土産物屋にある『根性』とか書かれたキー ホルダーを買ってくるような人だ。

「……まともなものを期待しよう

「そだね。とりあえず、さつさと工房を完成させてひよひさんをビックリさせよ~っと」

立ち上がった束を横田に千冬が何気なくつけたテレビにあるニュース映像が流れていた。

フランスに向かっていた旅客機が自爆テロにより墜落したというニュースが。そして、その旅客機は桂たちが乗っている便だった。

最初に目に入ったのは、黒焦げになりながらも自分をかばっている両親の姿だった。

鼻に入ってきたのはむかつくほど肉の焦げた匂い。

耳に入ってきたのは、未だに燃え盛る炎の音。

「父さん……母さん」

自分は大丈夫だと告げようとしたら、一人はボロボロに崩れた。まるで、役目を果たしたかのように。桂は聰明だった。だから、両親が死んだことも理解したし、泣くこともなかつた。そして、立ち上がるとき声が聞こえた。

「たたすけて……」

「……」

そこに居たのは、旅客機が墜ちる原因となつたテロリストの生き残り。はて？ 自爆テロを敢行したのに助けてくれとはコレ如何に？ 桂は無表情のまま手近にあつた瓦礫をテロリストの頭の上に落とした。

「ぎやぴ　」

訳の分からぬ断末魔の声を上げてテロリストは死んだ。そして、ふと思つた。もしかしてこのテロで生き残つたのは自分だけなのか？と。

「生き残りは……いるかな？」

しかし、あらかた探しても生き残りはいなかつた。全員死んでいる。何故か仲間はずれにされた氣分である。

「……弾かれた？」

自分が『みんな一緒に死んだ』という事実から弾かれた様に感じた。無論、それは運が良かつたのと両親のおかげなのだろうが、どうせなら両親と一緒に死にたかったと思う。でも、自分はこうして生きている。

「……」

桂は無表情のまま立ち去っていた。しかし、すぐに歩き出した。

弾かれた自分はここにいる必要はないと考えて。

数時間後にレスキュー隊が現場に到着したが、生存者はおらず『乗員乗客・犯人含めて全員死亡』という発表がなされた。

第1話 始まり（後書き）

ぶつちやけ、千冬や束とかりませたのは色々なフラグ（恋愛的な意味ではない）のため。まあ、プロットでは千冬が片思いになりそうだけどね。

とりあえず、次回は更識へ……。

第2話 流されて更識

「君が健一の息子、かな？」

「……誰だアンタ？」

ドイツで出会った企業の社長という男の協力で日本に戻ってきた桂。しかし、戻ってきても自分がふらりと現場から消えたので自分は死んだことになっているため居場所はない。そのため、とりあえず裏路地の不良などを潰してその日暮らしを行っていたのだが、ある日自分が根城にしている廃ビルの一室に一人の男が現れた。

「私は……更識楯無といつ。まあ……君の叔父といったところかな？」

「なるほど……アンタが親父が言つていた「自分にはもつたといない兄」つてか？」

「……弟の気持ちに気づいてやれなかつたダメな兄だがね」

結構、この界隈では有名になつていた自分。噂でしか知らないが外国で「うどじる」の諜報機関である『更識』ならば調べられるかと結

論づけた。

「んで？ 何か御用ですかね？ 一応、俺は死んでるんですが？」

戸籍上は死んでいるため、今までには闇医者とかに治療などは頼んでいた。もちろん金は、父親との特訓で身についた身体能力などを生かしたヤの付く自由業のお手伝いや、日本に戻るのに協力してもらった社長のコネを使っての便利屋の真似事などをして稼いでいた。恐らく、そんなことをしていたから見つかったのかと若干、自分の後先を考えないやり方に自己嫌悪。

「実は…君を『更識』に引き入れたいんだ。戸籍の方も、私の息子として作れるし」

「……それをやってアンタにメリットがあるのか？」

「……まあ、代償行為と思われても仕方ないかな？」

まあ、代償行為なのだろう。だが、桂はふと考える。最近は、やはり肩身が狭くなってきた。後ろ盾がないことも関係しているのだろうが、やはり年齢がまだ中学生なのが問題だろう。そう考えるとこの話は悪いことではない。戸籍も偽造してくれる上に、『更識』といつ後ろ盾を得ることができる。それに、「弾かれた」と思つていた桂はこうやって受け入れてくれる人に甘えたい。

「そんじや、お願ひします。親父がどんな人間だつたつてのも聞きたいし」

「うん。 それじゃあ…行こつか」

まあ、適当に楽しむかと思っていたのだが。

「「おにこりやん?」」

「……当主。」の一人は可愛いな

「フツフツ。ぜひともパパと呼んでくれ息子よ。まあ、それはそれとして見る用があるな」

ものすく楽しんでいた。

「しつかし……まあ……まさか次期当主候補にするとはねえ」

「まあ、宗家筋だしね」

桂は『更識桂』として更識に入り、父親が現当主の弟ということ、桂自身が優秀なため現当主の子供を差し置いて次期当主最有力候補となっていた。

「ま、それでも納得はしない奴はいるわな」

しかし、ポツと出の桂がその場にいるのを嫌うものもいる。歳若い連中はそうでもないが、やはり中堅以上の人間は「家を捨てた男の息子が何故?」という気持ちだ。それを押さえているのは現当主である樋無にほかならない。

「私としては『実の娘』だからとか『長年仕えているから』とかの理由で次期当主を決めるつもりはない」

ここ数代は世襲制だつたらしいが、それ以前は次期当主は前当主の指名制だつたらしい。世襲制がいいのは分かる。実力による指名制ならば、その人間を嫌う派閥などでまとまりが取れない部分もあるが、世襲制ならば『当主の実子から』と納得できるし、波風もあまり立たない。

「ま、所詮ははみ出し者か」

桂の立ち位置は「『更識』を捨てた男の息子」である。だからのか桂は自らをはみ出し者と称している。だが、実際いくつかの任務を任せると完璧に仕事をこなしており、評価も年齢を考えると高い方である。

「すまん」

「いや、当主や奥方には感謝しているさ。戸籍も作ってくれたし、後ろ盾にもなつてくれた。まあ、それだけでも大丈夫さ」

実際、当主とその奥方は桂の父親に負い目があつたのか、自分に目をかけてくれて、今ではそれこそ「冗談を言い合ひほどに仲良くなっている。

「さあて、玉櫛と簪と遊んでくるとするか。つーか、俺としても次期当主は玉櫛がいいと思つぜ？ 所詮、俺は『更識を捨てた男の息

子』だからな。そのほうが余計な波風を立てなくて済む

「……」

手を振つて部屋を出て行つた桂を見ながら櫛無は息を吐いた。世襲制にすれば組織にいらぬ波風を立てる。それは理解している。だが。

「それで、大事な弟を失つた……健一」

自分と弟は正反対だった。自分が活発なら弟は寡黙。自分が感覚的な行動を取るなら弟は理論的な行動といった風に。そして、互いに切磋琢磨して実力をつけていった。最初はどちらかが当主になるな

どは考へていなかつた。だが、高校生になつたときに父親に知られた。

『お前たちのどちらかを次期当主とする』

その日から、周りの空気が変わつた。自分を取り込もうとする分家の連中や外部組織。一人で修行をしていれば擦り寄つて来る者も居た。

だが、ある日のことだつた。協力関係にあつたロシアの諜報機関の隊長の娘との婚約話が伝わつた。こちらは次期当主が決まっていなかつたこともあり、三人で過ごさせてそのなかで決定するという取り決めになつた。

「えつと…ナスター・シャつていつの。よろしくね？」

「えつと…更識健一だ」

「弟の健一です」

そして、実際に顔合わせとなつたが、自分はナスター・シャに一目惚れした。彼女の顔を見た瞬間に自分の心臓がうるさくなつた。そして、彼女も自分で見て顔を赤らめていた。思えば、その時から弟は

気づいたのだ。自分たち兄弟は平等にナスター・シャにアプローチする事ができたが、弟はそれとなく自分とナスター・シャが二人になれるように動いていた気がする。そして、ある日の夜、健一に話があると呼び出された。

「兄さんは…ナスター・シャの事…好き?」

すぐく真剣な目で自分を見据えていた健一。自分は一瞬呆けたが、すぐに表情を戻して告げた。

「ああ。好きだ」

これは偽りない真実。自分はナスター・シャが好き。すでに彼女にも告白しており、キッチンとOKを貰っていた。健一は自分の返事に頷くと口を開いた。

「分かった」

そして、それだけ告げると健一は自分の部屋に戻つていった。恐らく、この時すでに健一は『自分がどうするべきか』分かっていたのだろう。自分とは違い、冷静に状況を把握する事に長けていた健一だ。

「健一。お前が次期当主だ。健一は…家を捨てた

翌日、父親から告げられたのは健一が最低限の荷物だけをもつて更識を出奔したという事実。健一の部屋へと走ると、そこにはナスター・シャがいた。

「健一…これ」

彼女が持っていたのは健一が自分とナスター・シャに宛てたと思わしき手紙。そこには、こう書かれていた。

『兄さんとナスター・シャへ。この手紙を読んでいるということは、僕が出奔した後だと思う。昨日　まあ、読んでいる田にもよるね。僕が出奔する前日に一人に別々に話をしたんだけど、その結果、僕がいないほうが色々な問題がないことが分かった。それに、兄さんとの家督争いっていうのもしたくないからね。まあ、家を出奔したのは申し訳ないけど、そろそろ派閥争いが本格化しそうだからね。僕としては兄さんやナスター・シャが幸せならそれでいいかな？　とりあえず、ふたり仲良くね？　僕は僕で生きて行こう。それじゃあ、お幸せにね？　健一』

それは勝手にもほどがある手紙だつた。全て自分で考えて自分が『これでいいだろ？』と勝手に結論づけて残された者の事など考えずに行動した結果の手紙。だが、分かるのは『兄弟で争いたくない』『こう気持ちと『兄の幸せを願う』という弟の気持ち。

そして、出奔した弟が幸せであるようにと妻となつたナスター・シャーと祈つていた。部下を使って秘密裏に調べていた。だが、健一自身が情報を改ざんしていたため、ようやく足取りがつかめた時には、先日の飛行機テロで死亡したことで絶望した。だが、息子が居た。最近、東京の裏路地に身元不明の子どもが現れた。何でも噂では、先日起こつた飛行機テロの生き残りらしい。その情報を聞き、駆けつけた。そこに居たのは、弟の面影を遺した桂だった。

結局、弟の結婚を祝うことも出奔した時の恨みを晴らすこともできなかつた。だから、せめて弟夫婦の忘れ形見を引きとつて自立できるまで育てようと思つた。そして、桂の才能に気づき、桂を次期当主候補に挙げたのだ。

「……桂には悪いが、出来ればあいつに『権無』を継いで欲しい」

そうすれば、自分たち兄弟のような事は起こらない。自分の娘達が険悪な仲になることもない

「勝手だな」

そして、それが確率の低い願いである事も理解している。多分なのだが、桂はしばらくすればここを出ていきそうな気がする。今は、娘たちの世話が楽しいようで色々教えているが、それも一段落つけば「はみ出し者」を自称しているのだ。ここを出て行くだろう。

「なら…その時に便宜をはかるのもいいかもな」

それならそれでいいかも知れない。その時は…まあ、後悔しないようにはしたい。楯無はそう思っていた。

しかし、この数年後に一人の天災により世界のパワーバランスが崩れ、世界が変革し、桂もある任務で片腕を失う事件が起きたこととなつた。

第2話 流されて更識（後書き）

とりあえず、現状の確認的な話。

というか、あれですね。HDクラッシュして数日経ちましたが、何とかクラッシュしたというのを実感しても「ああ… そうか」という賢者モードみたいな思考になりましたね。

とりあえず、クリスマス用の短編を幾つか考えてモチベ回復を図ろうと思います。

第3話『白騎士事件』の存在による雑事

「はあい！ レツルッキン！ 次のうち仲間はずれはどうう！」

桂が示したボードには四つの絵が書かれていた。ライオンと人間とサメとスズメ。桂は現在、妹である玉櫛と簪、そのお付きである布仏虚と本音姉妹相手に遊んでいた。

「えつと……サメですか？ それ以外は陸上に住んでいるし」

「虚ちゃん……惜しい！ 正解は人間です。人間以外は食えます」

「…………え？」

「ぶつちやけるとスズメも食えないことはない。ただ、人間はなあ」

「あの……兄さん？」

「ちなみに、スズメはしっかりと焼かないとダメだぞ？」

「あの……桂さん。別に誰も聞いていませんよ?」

スズメの調理法に話がシフトした桂を見ながら四人の幼女は大量に汗をかいていた。このままここにいると知つてはいけないことを知つていそうになる。

ちなみに、桂は性格が変わった。以前は、寡黙で物静かだったのがいつの間にか飘々とノリが軽くなつた。楯無は理由を「人と触れ合つたから」と推測していたのだが、実際は違うようである。

「桂。少しいいか?」

「ん? 今、サバイバル知識の伝授を「任務だ」…了解

「「「（助かったー！）」「」」

四人の幼女は揃つて息を吐いていた。それをみて桂は「るー」と泣いていた。

「さて、仕事とこいつのはHS関係のことだ

楯無に連れられてやつてきた部屋。そこで、告げられたのは日本政府から「エリ開発者である篠ノえ束の『数少ない』親友である織斑千冬とその家族の護衛」という依頼だった。

「で？ なんで、俺にお鉢が回ってきたんです？」

桂は基本的に単独行動を取っている。他の構成員との折り合いが悪いものもあるし、何より桂自身が単独行動によるゲリラ戦術を得意とするためである。

「つむ。実は、織斑千冬からの指~~ぬ~~りじいぞ？ お前…生きていたこと伝えていなかつたんだろ？」

「あ～。といふことは、束が調べていたか

自分が生きていたことを千冬たちに伝えていなかつたのは、特別な事情があるわけでもなくただ「忘れていた」というだけ。

「まあ、『J指名ならやりましょつかね。ちなみに、銃火器の使用は？』」

「……ナイフのみだ」

さすがに銃火器は「まかしが効かないらしい。それくらいやつてくれればいいのに」と思いながらも準備をするために部屋を出て行く桂。

数ヶ月前に世界を変えた「IS インフィニット・ストラトス」と呼ばれるマルチフォームスーツ。それを発表したのは、幼なじみの束だった。桂は要人警護の任務でその発表の場に居たのだが、簡単な説明を受けているうちにISがどのようなものか分かった。

「まさか、母さんに見せていた設計図があれとはね……」

母親の病室で試行錯誤していた設計図の完成形。それがIS。となると、その数日後に起こったハッキングにより日本に放たれた大量のミサイルとそれを鎮圧したIS『白騎士』を捕獲しようとした各

国軍との戦闘の総称である『白騎士事件』の白騎士は。

「千冬だな。つーか、あのバカども。やるのは勝手だが、後始末をするのは俺たち暗部なんだよ」

日本に飛来したミサイル。白騎士により半数を撃ち落されたが、残りを落としたのは『更識』や自衛隊。とにかく、フレアやらなんやらをばらまいてミサイルを爆破していくのだ。

「それを千冬のバカが……」

自衛隊の戦闘機がフレアをばらまくために白騎士を通りすぎようとした際に翼を切り落としたのだ。幸いにもミサイルが着弾したのは開発中だった臨海エリアだつたため人的被害は無かつた。状況が状況のため仕方ないのかも知れないが、それならばそんな事件を起こそなと言いたい。

「それで助けを求めるか……ま、金さえ貰えればなんでもいいか

桂は部屋に戻ると装備を整えて歩き出した。途中で、仲の良い連中から土産を頼まれつつ屋敷を後にした。

「んぐ？ 満足か？ こんな世界で」

「……分からぬ」

織斑家に向かうと、そこに群がっていたマスクなどを「齧つて」
帰らせると家の中に入り、千冬との会話を始めた。

「お前らに色々言いたいことはあるが……俺は公私混同はしない主義なんだな」

そいついで、盗聴器などが仕掛けられていなかをチェックし始めた桂。千冬はその背中をただ見てることしかできなかつた。

「……これからお前と束はツケを払い」とになる。世界を変えたんだ。尊敬される」ともあれば恨まれることもある。それを理解することだな

「……お前は？」

それは一連の騒動で理解した。だが、聞きたかった。桂はどう思っているのか？ ISを開発したことをどう思っているのか。仮にも桂の母親が関与しているのだ。それを聞いたかった。

「別に？ 僕は世界から弾かれたからな。人権も、今話題になつている女尊男卑の風潮もどうでもいい」

飛行機テロでたつた一人生き残った事、その後戸籍がないまま裏の世界で生きてきたこと、『更識』での立場。その他様々なものが桂に『世界から弾かれている』と判断させた。

「というより、聞くくらいならするな」

盗聴器をいくつか回収し、それを一つ一つどこの諜報機関が設置したのかを調べながら会話をする。桂の中では千冬たちが世界を変えたことをとやかくいうつもりはない。ただ、自分たちの仕事が増えたので文句を云つているのだ。

「まあ……なんかあつたら言えばいい。幼なじみということで格安で色々引き受けよう。汚れ仕事から何からな。あ、それと俺はもうそろそろ外国行くから」

「どういった事だ？　『更識』を抜けるのか？」

そもそも暗部組織から離脱することができるのか不明なのが、桂は近いうちに再び姿を消すと言っているのだ。

「日本に戻つてくるときには世話になつた人が、今度設立されるIS委員会の理事になつたからな。直下のHージェントとしてスカウトされているんだよ」

ISの管理などを目的として設立されるIS委員会。世界から集められた各国代表より構成される委員会。その委員会のイギリス代表として選出されたアイザック・アルバートからスカウトを受けていふ。元々はドイツの企業の社長だったが、IS台頭による情勢変化を察知し、職を辞して母国であるイギリスに帰還。その後は、知り合いのツテで諜報機関やらイギリス王室直下の警備隊などを流れ歩いてその才覚を認められて委員会への代表に選出された。

「なんつーか、気に入られていてな？」

日本に戻つてくるときはイギリスに戻る直前だつたらしく、その後も連絡を取り合い色々と融通してもらつた。思えば『更識』よりも強固なコネを作れた気がする。

「『更識』での俺の立ち位置は『家を捨てた宗家の落ちこぼれの息子』だからな。居心地が悪いのよ」

無論、父親が落ちこぼれといつことは絶対にありえない。むしろ、『更識』から逃げ続けていた点を見れば十分すぎるだひつ。

「義理の妹もできたが……ビーモ、組織に縛られるのは面倒だと感じた」

その点、アイザックは「田的のためなら人質もとるし、暗殺もする」男。ソッチの方が良さそうだ。無論、玉櫛たちが可愛くないわけではない。だが、どうにも『合わない』のだ。それはやはり、世界から『弾かれた』と感じたあの飛行機テロの事件がきっかけなのだろうと判断していた。

「どうせ死ぬはずだった人生。自分の好きなように生きなけりゃ損だろ。お前もそのくらいの考えていけばいいんじゃね？」

「できるわけがないッ！　一夏もいる……」

「ブランもいこねえ……ま、言わなくていいつか」

桂は昔から千冬はブランだと思っていた。とにかく、桂は両親

がいない故の過保護だと判断していた。しかし、今は千冬は一夏に依存しているように思える。恐らくは、一連のIS関連の自体で追い詰められているのだろう。

「とりあえず、少しは一夏を ツ！ 伏せろ千冬！」

「え？」

殺氣を感じた桂は千冬を押し倒した。そして、そこに撃ち込まれたのは銃弾。入ってきたのは一人の人影。見た感じ、訓練された軍人のようである。その男はライフル銃を持っている。装備がナイフしかない桂は状況の悪さを呪つた。

「チツ、どういう事だ？ 周囲は各国の諜報機関が固めていたはずだろ？」「

「桂、それは本当なのか？」

桂の毒づく声に千冬が声をあげる。桂は、腰からナイフを取り出すのと同時に懐の携帯から『更識』へと緊急事態を告げる通信を送る。

「当たり前だろうが！ お前と束が『白騎士事件』の首謀者だとうのは各国上層部の共通見解だ。あんまり『國家』をナメるな！」

「織斑千冬……貴様のせいで私の妻がア！」

男はそう叫び、ライフルを千冬へと向けた。幸いにも、桂が抱えて飛び退いたおかげで千冬に怪我はなかつたが、千冬は完全に恐慌状態に陥つていた。桂が殴つて気絶させたため声はすぐにあさまつたが、桂は内心そうしておいてよかつたと感じた。

「おおかた、どつかで『白騎士事件』の真相を知つたか。そういうやミサイル着弾の衝撃で階段を降りていた妊婦が転落して胎児共々死んだとか聞いたな……その遺族か」

「そうだ……その女のせいだ！」

ミサイル着弾地点の数キロ先にあつた団地地帯。衝撃というよりもミサイル落下の音に驚いて怪我をした人間が結構な数居たのだ。『白騎士事件』のインパクトが強かつたため公には知らされていない事実。

「まあ、アンタの身の上にも思うことは色々あるが……悪いな。こいつを殺させるわけにはいかないんだよ」

「何故だ!? そんな女を生かしておく必要がどideonある?」

「そんなん知らんがな。こつちは命令を受けているんだから」

桂は周囲にいるはずである各国諜報機関の人間を本気で呪いたくなつてきた。

「各国諜報機関が動かないのは……装備がないからといつことにしておこう。考えるのは面倒だ」

篠ノ之束への脅しのためなど大体の予想は付いているが、今は千冬を守るのが最優先されるべき事項。しかし、ライフル相手にナイフで挑むのは。

「さすがに分が悪いな……しかも、あのおっさんもつ錯乱状態だろ」

「妻の……娘の仇だ！」

しかも、こちらには千冬がいる。戦いにくいにもほどがある。

「つーか、CIAでもGSG-9でもいいから仕事しろよ。田の前で人が死にそうに……無理だな。そんな自国の不利益にしかならぬことをするわけがねえ」

最悪、腕の一本でも犠牲にするしかない。といつより、そつとさと下
付けなければ援軍が来たときに不測の事態が起ころる可能性が高い。
例えば、錯乱した男がライフルを乱射など。

「ま、なるようにならうね！」

「死ねえ！」

桂に気絶させられた千冬が目を覚ましたのは銃声だった。目を開く
と田の前にボトリと落ちてきた左腕。顔を上げると、男の喉にナイ
フを突き立てている『左腕がない』桂だった。

「妻の……子供の仇を……」

「ハツ……知るかよ

「あ　　」

千冬は男を殺してその場に崩れ落ちる桂の姿だけを見ていた。

田口つるるのは『赤』

第3話 「白騎士事件」の存在による雑事（後書き）

次回より、主人公が本格的に動きます。

白騎士事件の裏側についてはまあ、捏造です。そして、千冬さんは原作より弱体化します。能力ではなくメンタル的に。

ちなみに、ヒロインはMを予定しているんですが、シャルもいれて一人のヒロインにしようかなと思っている作者です。だって、シャルもある意味ねえ？

第4話 流れ流れてアイザック

「行くのか？」

「ああ。元々、そろそろここから離れるつもりだったしな。心配しなくても、パトロンはいるや」

簡単な荷物を持ち、トレンチコートを着ている桂は、屋敷の廊下で櫛無と会話をしていた。

「元々俺の『更識』入りは歓迎されていなかつた。そんなときに俺が左腕を失つた。追い出すにはいい口実じゃないのか？」

任務を失敗したわけでもない。むしろ、織斑千冬の護衛という任務は完全に果たしている。しかし、古参の人間は納得しなかつた。といふより、難癖をつけて桂を追いだそうとしているのだ。

「まあ、あの爺どもにとっちゃあ俺は邪魔者だらう。どうせ玉櫛の後ろ盾にして利益を得たいんだらうよ」

「情けないな。いや、組織が腐敗するのは当然か」

要するに桂は邪魔なのだ。日本政府からも桂を指名してくる者もある。有能すぎる桂の手綱を取ることが難しいと判断した更識の幹部は今だ子供の玉櫛を次の権無としようとしている。

「まあ、玉櫛がそんなタマージャないのは分かるけどな」

「あの子は聰いからな。いずれ爺様共も思い知るだろつよ」

一人してくつくつと笑う。老獴と言えば聞こえはいいが、所詮は自分の利益を守るうとしている老害である。ひとしきり笑うと桂は存在しない左腕を一瞥すると鞄を持ち歩き出した。

「すまん。だが、何かあれば言つてくれ。私に出来る範囲で協力する」

「いいつて。アンタは嫁さんと娘を守ればいいんだよ。男一人、適当に生きていくさ」

何より一国の暗部組織に過ぎない『更識』よりも強大な人間の専属エージェントになれるのだ。それこそ難癖をつけてきた女など逆に牢屋にぶち込めるだけの権力を持つた人間の専属エージェントに。

「それじゃあ、玉櫛たちには適当に言つておいてくれ。まあ、そんなに深く付き合つていなかつたから大丈夫だろ？けどな」

そう言い残し桂は闇夜にまぎれて『更識』より姿を消した。

「やう思つてるのはお前だけだよ。玉櫛も簪も、虚も本音もお前を田標にしていたのだ」

確かに、実際に会つたのは数えるほどだらう。しかし、彼女たちはその数回で桂の能力などを見抜き、田標としていた。

「時間が重要ではない。密度が重要なのだよ。しかし……これは玉櫛たちが暴れそうだな。いや、それはそれでいいのか？」

桂を尊敬していた玉櫛が『櫛無』となればどうなるか。老害どもはもう少し『若者の考え方』を理解するべきだらう。

「しかし、情け無いにもほどがあるな私は」

また止める事はできなかつた。弟の時よりも前進はしていたが、結局行かせてしまつた。本当に馬鹿な男だ。櫛無がそつと血潮するとどこからか声が聞こえてきた。

『まあ…桂はああいう子だからねえ。組織に縛られるより、個人のエージェントとして動いたほうがいいでしょ。だから、気にしなくてもいいよ』

「……そう、か」

幻聴かもしれないが弟の声が聞こえてきた。だが、樋無はそれが幻聴ではないと確信していた。

「……んで？　これ何よ？」

「義手だ。ISの技術やその他諸々の技術を使った特製のな

『更識』を後にした桂は数ヶ月中国の崑崙山にて修行を行つた後、イギリスはロンドンにいた。パトロンにして上司であるEHS委員会イギリス理事のアイザックと久しぶりの対面を果たしていいたのだが、そのなかでアイザックに渡された物。それは、如何にも『機械の腕』と呼ぶにふさわしい義手だつた。

「もちろん、お前にもその義手を接続するための手術を受けでもらう必要があるがどうする?」

「面白やうじやん。やつてくれ

「フッ。お前ならそうこうと思つていたよ」

その手術は数時間にも及んだが、桂は手術後も寝ることもなく義手の調子を見ていた。

「結構…いい感じだな。つーか、触覚がないのを除けば生の腕より調子がいいかも知れないな」

「一応、現時点での世界最高レベルの技術を使用しているからな」

桂の賞賛にアイザックは事実を告げる。そして、その義手をおへつてきたのは篠ノ之束だと。

「どういう事だ？」

「まあ、お詫びだそうだ」

曰く、自分の見通しが甘かつたせいで左腕を失うことになつた桂へのお詫び。桂は思うこともあつたが、もらえるものはもうひとつ主義なので素直に感謝しておいた。

「ちなみに、その義手は多種多様な運用を視野に入れて作られている。専用のカートリッジで変形するらしいぞ?」

「ほー。基本形態はこの状態か」

「お前が会得したという『電磁発勁』を補助するためのダイナモ。及びそれを利用したソナーや発熱装置。それが基本の状態だ」

中国の崑崙山に居た老人に教えてもらった『電磁発勁』はE.Sの絶対防御すら透過する技だった。ただし、左腕を失つたことによる人體の気が流れる道『経絡』や氣の流れ自体が乱れているため、使用すれば体への反動があるものだった。そのため、それを補助するブ

一スターとしてのダイナモが装備されている。

「地上戦・至近距離ならばISを破壊できるお前の能力を腐らせるわけにはいかないんでな」

「だろうね」

ISに触れなければならぬとはいへ、ISを破壊できる術を持つ桂。その戦力を有するアイザックは自身の目的を桂に話し始めた。桂を完全に協力者とするために。

「私は今の女尊男卑を変えたいのだ。軍内の再編が行われたのは時代の流れだ。しかし、それに伴う女尊男卑の風潮は変えなければならない」

アイザックはISが世に出たのは運命だと思っている。かつて、戦車がより高性能の戦車に取つて変わられたように、新人が旧人を駆逐して分布を広げたように。

「だが、片方がもう片方を隸属するという状況……實に似ていなか？ かつてのドイツによるユダヤ人迫害のように。アメリカに入植した白人が先住民を壊滅させたように」

「つまり、今の『男が女に隸属している』状況を改善するのか？」

「うむ。協力してくれるか？　もし、協力してくれるのならば……私の全てを持つてお前の願いをかなえてやる」

アイザックは子爵家の次男。家自体は兄が継いでいるが、兄弟仲はよく『手段を選ばない神算鬼謀』とイギリス国内で恐れられているアイザックをして「兄上は……私以上の策略家だよ。自覚はないだろうがね」と言われるほどの「お人好し」の兄のサポートがある。そしてなによりアイザック自身がそれだけの権力を持っている。恐らく、大半のことは実現可能だろつ。

「……へつ。面白い。のつてやるよ。俺の望みはそんなにない。なんか頼みごとがあつたらそれを出来る範囲で叶えてくれるだけでいいわ」

「ふむ……欲が少ないな」

「なんかさあ……一度死にかけたせいかね？　必要以上の物欲とかが薄いのよ」

「……まあ、いいがね」

どうせいずれ『欲望』が強くなるだろ。例えば、『同類』を見つけた時とか。とりあえずは、大事な部下にして協力者の意向を叶えることを優先させた。桂が頼んだ『ISと斬り合っても欠けることのない日本刀』を造らせるために。

「兄さんが、ねえ」

それは少し時を遡る。桂が『更識』を抜けたと自分の従者と妹との従者に父親から知られた事実。その時に父親から桂が消えた理由を聞いた。

「ふうん……そつか……自分たちの利益がなくなるからかあ……」

「お、お姉ちゃん?」

怯えるような妹の声に気づいたのか玉櫛はすぐに表情を戻し、簪の頭を撫で始めた。

「大丈夫。かんちゃんはお姉ちゃんが守るから」

そして、自分の従者とその妹にも微笑を見せる。何も心配はいらぬのだと告げるようだ。しかし、その内心はマグマのように煮え立つていた。

「（兄さんを排斥するなんて…ただ後ろで指示を出すしかできない老害がやつてくれるじゃない。暗部組織が優先すべきは能力でしょ）

」

義兄が行なってきた任務は自分が成長してIRSを所有したとしても実行出来るか怪しい。父親が連れてきた義兄。義兄は強かった。そんな義兄に憧れたし、義兄が『権無』となつたらそのもとで存分に力を振るいたいとも思つた。だが、それももう叶わない。

「でも、私が『権無』になれば……」

義兄も戻つてこれる。玉櫛はそう考え、簪たちを老害どもから守るためにも力をつけることを決めた。

惜しむらくは、桂自身に『更識』に戻つてくるつもりがないことだ
る。

第4話 流れ流れてアイザック（後書き）

クリスマス？ 何それ美味しいの？ 自宅で、友達と桃鉄しながらピザ食べますが何か？

さて、とこうことでそろそろプロローグも終わります。次回は、メインヒロインの登場です。さて、誰でしょう？

あと、シャルがもう一人のヒロインていうのはどうでしょうか？

第5話 新天地での初任務

「大将！ 戸籍一つ用立ててくれ！」

「ん？ どうした？」

ある日、アイザックから与えられていた任務を終えた桂が、アイザックがいる屋敷へと戻ってきた。そして、背負っているのは一人の少女。

「ふむ… 桂。いくら女に飢えているからと言つて『ちげえよ』そうか？」

アイザックはとりあえず、少女が日本人らしいのでそれ用の戸籍を用意しつつ事情を聞き始めた。

「……寒い」

桂は現在、ロシアのツングースカにいた。というのも、アイザックがツングースカにおいて非合法研究所が存在するという情報をつかり、その研究所の調査をアイザック経由でIS委員会より命ぜられたのだ。

「やっぱウォッカってロシア人に必要なのがよくわかったわ」

スキットルに入ったウォッカをちびちびと飲んで、ピロシキを頬張つて件の研究所を双眼鏡で見る。

「しかし…あの研究所って何よ？」

あのIS委員会ですら全貌がつかめなかつた研究所。桂単独で行動するのも、被害を最小限に抑えたいとの思惑があるのだろう。例えISでも、室内戦ならばそのアドバンテージは存在せず、ISを触れるだけで破壊できる電磁発勁を持つ桂に利がある。

「さてと、行きますか」

白いコートを取り出し、雪原の中を進む桂。少しづつ研究所へと近づいていく。

「……赤外線センサーの類は無し……ソナーにも反応なし」

束が送ってきた義手は凄まじい性能を持つていた。『タケミカヅチ』と名付けられているこの腕は、その名の元となつた武甕槌大神の伝承にあるように形や性能を変える義手。現在、桂が使用しているのはソナーやレーダーなど索敵に特化した『レーダーアーム』。単独行動大好きな桂にはうってつけである。

「さてと……行くか」

右手にオートマチックタイプの拳銃を持ち音もなく研究所を駆ける桂。目指すは研究所の中核。何かしらの情報を持ち帰らなければおまんまの食い上げである。

「つーわけで、死んでくれや」

「ハーパー」

偶然見つけた研究員らしき男の背後に忍び寄り、腰のホルスターに拳銃をなおすと右手で男の口を塞ぎ、指の部分が鉤爪のように変形した左手でその首を搔つ切り息の根を止めた。

「マジで便利すぎる。これ本当に義手なんだろ?」

腕型I-Jなのではと思つてしまつぱい性能がよすぎる義手に驚きながら男の身ぐるみを剥がし始める。『ロカードの名前と『写真を』レーダーアーム』のカメラで撮影しつつソナーで辺りを探る。そして、ある部屋から数人の話し声が聞こえてきた。さすがに内容などは聞こえなかつたが、居場所を探るには十分である。

「そんじゃあ…行くか」

拳銃の調子を確かめつつその部屋の前まで移動すると、ソナーで再び音を調べ始めた。

それじゃあ、約束のものだ。

ハツ。男のくせにいい仕事をするじゃねえか。

クツクツク。

「（丁度研究成果の引渡しの場面か？だが、ロシアが非合法研究をしているという噂はなかつたはず。いや、むしろロシアの求心力を低下させる勢力という線もあるか）」

そもそもロシアも多民族連邦国家である。決して一枚石ではない。
そう考へると選択肢は大量にある。

「（まあ、それは俺が考えるべきものではないな）」

あくまで桂はエージェントである。情報の判断などはアイザックが行う。自分は情報を持ち帰るだけ。

と云うで、そこにいるネズミは誰だよ！

「……あります。HISを装備していたのかよ」

『ツルツルエスカレーター』

そう言わされたので鋼鉄の扉を蹴り飛ばして部屋に入った桂。さすがに生身で鋼鉄の扉を蹴り飛ばすのは意外だったのか中に居た三人の男女も目を丸くしていた。

「ちーす。IS委員会のヒージェントの高槻桂でいぞー」

どこのや 夫のように声をかけた桂はざっと敵を見た。女が一人に老人がひとり。女一人はISを装備していると仮定して、どうやつてここから逃げるか考えていたのだが、老人が拳銃をこちらに向けたので、とっさに左腕をレーザーライフルに変形させてその頭を撃ちぬいてしまった。

「ヒュー じゃねえ。やつちまつた」

思わずサイコガンを持つ一匹狼の宇宙海賊を称するような声を上げたが、左腕からの光学兵器。あながち間違いでもない。しかし、そのせいで女たちの警戒レベルを跳ね上げてしまつたようで二人ともISを開いていた。そのISは両方共『強奪された』IS。

「あ? アメリカ製の第2世代の『アラクネ』にイギリス製の第1世代『エンフィールド』だな。強奪品をそのまま使うか……ふうむ。ま、室内だしなんとかなるか」

「ナメてんのかテメー！ 男のへせこよー。」

アラクネを装備している女はあからさまに桂を見下しているが、桂はそんな女を冷めた目で見る。

「ああ… アンタ三流か。なら仕方ないわな。んじゃま…… テメーらをしおりに見下すのもいいが、」

「んだとー…？」

「男だらうが女だらうが『裏の人間』なら能力で判断するのが常識。つまりそれすらできねえテメーは三流だよ！ トシの名前も『アラクネ』じゃなくて『アバズレ』に変えとけやー！」

左腕を通常状態に変形させると、そのまま殴りかかった。といつても、無策ではない。相手が激昂しているからこそ、そして見下しているからこそ桂に分がある。

「紫電掌ー！」

「んなー…？」

左腕がアラクネの脚に触れた瞬間、脚内部に高圧電流が打ち込まれ、脚は内部から爆発した。通常ならばありえない事態。しかし、アラクネの操縦者は状況をすぐに判断すると僚機に声をかけた。

「エム！ 撤退する。テメエは「足止めをする。」についてはBT兵器がある」「わかつてんじゃねえか」

アラクネは脚部だけではなく全体に電流が流れたため細部に不具合が出始めた。一方エンフィールドは無傷。足止めには十分だろう。アラクネは天井を破り最高速度で離脱し、エンフィールドは今だ製作型で決して性能がいいとは言えないBT兵器を2基射出すると桂に向け飛ばしたのだが。

「あ～らよつと」

桂が左腕を広げると、BT兵器は『磁力に引っ張られる』かのようになきとも左手の中に吸い込まれ、桂により握りつぶされた。

「まあ、鉄製だからな。これも『電磁発勁』の応用だ」

左腕を強力な電磁石へと変え、BT兵器を吸い寄せる。エムと呼ばれた少女は桂の底の知れなさに知らずのうちに後ずさっていた。そして、そのような自分に気づきがくせんとしていた。

「私が……恐れている？」

「まあ、世界は広いからねえ。気にしなくてもいいんじゃないかな?
？ とりあえず、君捕縛ね」

エムが何かするよりも早く桂が動いた。左腕を床に付けるとエンファールドが高濃度の電磁パルスが発生したと報告し、システムの大半がダウンしばじめた。

「な……まあ、眠つてこいくれや」「え？」

いつの間にか自分の鳩尾に左腕を当てていた桂。次の瞬間、エムの意識は暗転した。

「ん？ 吐血？ 内臓には負担がないように電力調整をしたはずだが……」

吐血どころか耳や鼻からも血が出ている。一応、調べてみるとナノマシンの死骸であることが判明した。

「……持ち帰るか。色々事情を聞かなきゃならんし」

待機状態に戻った工場を回収しつつ、工場を担いで研究所の「コンピューターからデータを一気に吸い出す桂。左腕大活躍である。

「そんで今に至る」

「……なるほど。しかし、研究所のデータは微妙だな。非合法ではないといえばそつなんだが、な」

桂が持ち帰った情報は、グレー部分の研究が多く問題がないと上が判断すればそれでお終いになるような情報だった。

「せこせこの……剥離剤か？ コレくらいしか有用なものはないな」

「ふーん。お？ 大将、目を覚ましそうだぞ」

左腕をマシンガンに変形させ、工場に突きつけながら田をさますのを待つ。アイザックはそんな左腕を見て改めて『天災』の技術力の高さを思い知る。

「…………」

「グッモーニン? とりあえず、知つてこいとを全て話してもうおつか」

「……ふむ。桂と回り身の上か?」

「私は…………それこ、いじむは…………」

エムは現状が理解出来ていないようで、必死に記憶を探つてゐるようだつた。

「それと、お前の体から出てきたナノマシンひとつでも残してもらおうか?」

「え? ナノマシンが?」

「クソッ……あの糞野郎が……スコール。エムの馬鹿はまだ帰つて来ないのか！？」

「ナノマシンの反応が無くなつたわ」

二人の女性が薄暗い部屋で会話をしている。片方は、アラクネに乗つていた女性。その女性は桂への悪態をつきながら傍らに立つ女性スコールに声をかける。そして、返ってきたのはエムに投与していた『首輪』の反応が無くなつてこと。ついこと。

「おこ待つてくれ……それってあの馬鹿が死んだつてことか？」「…

「やうでしょうね。その高槻桂とかいう男……要注意しないとね。オータム」

「分かつてるよ。あのジラ野郎はアタシが殺してやる

アラクネの操縦者オータムに目をつけられた桂。オータムと再び相
まみえるのは数年後の事だ。

「……ん？ 今、何か不本意な呼ばれ方をしたような

「お前意外と余裕だな？」

銃を突きつけつつ何かを察知した桂。こいつも大概である。

第5話 新天地での初任務（後書き）

万能な腕。ライダーマンのカセットアームつーか、ガイキングの超兵器ヘッドツーか。ところで、なんでライダーマンの腕つて左腕から右腕になつたのだろうか？ やつぱアクションの関係ですかね？ 別にいいけど。

さて、メインヒロインが出てきました。皆わかつたかな！？（棒

基本的にはこの一人で行動します。シャルは現在考え中。シャルはヒロインにしようと思います。そこで質問、お母さんをどうしましょ？ 生存させるならば、アイザックがシャルのお母さんに恋していく～とかいうストーリーが思い浮かんだのですが……多分、アイザックVSデュノア社長になる……面白そうではあるな。

PS・作者はお酒は結構好きです。出身の関係で芋焼酎が好きですが、カクテルも好きです。飲むのはスクリュードライバーやバラライカなどのウォッカベースが大半です。お酒は二十歳になつてからですよ？

12月29日 サイレント・ゼフィルス エンフィールド、その他
修正

第6話 一人のはみ出し者

「私は……マドカ。亡国機業のエージェントだ」

「亡国機業？ 大将、ナチスの残党つてまだ残つてんのか？」

「残つてはいるが、ナチス残党とは限らん。それより、続けてもらおう」

ナノマシンが体から排出されたことで、マドカはなにやら声を上げたがすぐさま冷静になると桂たちの事を聞き、状況を理解したのか投降してきた。そして、現在桂とアイザックにより尋問中である。といつても、マドカ自身が協力的なため食事や飲み物を用意してさながらお茶会である。

「すまない。私は…末端に過ぎないから全貌は知らない。ただ、多国籍の秘密結社だというくらいしか」

何よりもマドカ自身が参加して日が浅いため大した情報も持っていないらしい。桂はマドカの顔が千冬と瓜二つなためクローンやその他の問題を考えていたが、どれも推測でしかないため余計な口出しあはしなかつた。

「まあ、それはいい。貴様はこれからどうする？」

「え？」

「私は駒を必要としている」

アイザックは自身の目的を話した。その上で協力するならば、戸籍も用意するし、所有しているハンフィールドも『強奪』されたということもみ消すとも。

「まあ、断つたら地下室行きだがな」

そして、待っているのは拷問かもしくは捨て駒としての未来だろう。マドカはそこまで分からぬほど馬鹿ではない。

「……わかりました。貴方たちに従います」

選択権など最初からなかったのだが、それを差し引いても破格の条件とも言える。

「ふつ。桂、この少女は「高槻マドカ」として戸籍を作る

「俺の妹こすんのか？」

「…安心しろ。結婚できるよ」と従兄弟で偽造しておぐ

「おこじゅ」

後の教育などは桂に任せると告げ、アイザックは部屋を出て行った。

「つたく…あのオッサンは……」

アイザックに悪態を付きつつ、マドカに向直る。

「さて、とつあえず……『はみ出し番』同士仲良くなづかせ

桂が差し出した右手をマドカはおどおどしながらとった。『すでに死んでいる』桂と『生きている証がない』マドカ。似たもの同士の二人がこの時出会った。

「まあ、やることは変わらないけどね」

「やつなの？」

桂から自分たちの仕事の説明を受けていたマドカ。桂自身も仕事を整理するつもりだったので丁度良かつた。ちなみに、今いるのはアイザックの屋敷にある桂の部屋である。桂自身の物欲が薄いためベッドと小型の冷蔵庫、報告書作成用のパソコンを置く机くらいしかない殺風景な部屋。しかし、アイザックより「部屋は監視の目的もあるから相部屋」と言わされたため、色々買い足してメイドなどに女用の小物などを買ってきてもらつてそれなりにいい部屋になつた。

「基本的に、大将：アイザック・アルバートの指示で俺達は動く」

そして、カーペットの上に座つてマドカに説明を始める桂。名田上桂はIS委員会直下特務機関所属のHージェントである。しかし、実態はアイザック専属エージェント。

「まあ、大将自身がＩＳ委員会を手中に収めるつもつらしきんだがな」

「可能なのか？　さすがに…難しいと思うんだが」

「何でも『利権と保身が確保出来れば別に構わない連中』らしいぞ？」

ＩＳで女性の地位は向上し、男性は隸属を余儀なくされている世界になつた。しかし、それは一般階級のみ。イギリスならば貴族社会、アメリカならば支配者層といった世界では相変わらずの実力・階級社会。そして、その世界からＩＳ委員会の理事に選出された者たちは利権と保身の手段が確保出来れば構わない。アイザックはそこにつけこんでいるのだ。

「俺の予想では…後数年もしないうちにＩＳ委員会を自分のものにするな」

「……」

アイザックの「弱み？　無ければ作れ。目的のためならば手段を選ぶな」なやり方を知つてゐる桂としてはＩＳ委員会を手中に収めるアイザックの姿が簡単に想像できた。

「まあ、それは置いておいて。俺達の仕事は一言で言えれば『何でも屋』だ」

「それはあなたと出会った件からも分かる」

桂と出会つことになったロシアの一件。そこから想像できることは正しく『IS委員会の狗』として汚れ仕事などをするとこり」と。まあ、マドカも元秘密結社エージェントとして色々やつてきたので別に忌避感はない。

「とりあえず、現時点ではIS関連研究の内偵や要人警護、そして…反動勢力の壊滅などを行つ事になる」

ISによる世界情勢への不満を持つ者、ISを使用して国家転覆を狙う者などひとえに反動勢力と言つても無数に存在する。

「とりあえず、俺らの仕事はそんな感じ。他に聞きたいことはあるか?」

「それじゃあ…アラクネの脚を破壊したあの技は一体なんなんだ?」

「マドカはずつと気になっていた事を聞いた。ツングースカの研究所

でアラクネの脚部を破壊した技とその左腕。それがどのよつなもののかずっと気になっていた。

「左腕は義手だ。一応「タケミカヅチ」とこいつ名前だな。篠ノ之束より送られてきた一品だ」

「なるほど…で、あの技は？」

束が作った義手ならば、あそこまで構成のなのも納得できた。では、あの技は一体？ マドカは桂に問いかけた。

「技…といつか、あれは『電磁発勁』と呼ばれる技を応用した掌底だな」

「電磁発勁？ 気功の一種なのか？」

発勁といえば中国拳法などよく聞かれる事。マドカ自身モレヒロは詳しくないため「発勁＝氣功」という式が出来上がっている。

「ん…まあ、そんな感じでいいわ。とりあえず、俺は生身で電気を発生させることができると考えてくれ」

ぶつちやけ面倒になつたため「発勁=気功」で押し通すこととした桂。さつさと説明を済ませようという魂胆らしい。

「本来なら隻腕のせいで経絡などに欠陥があるため体に反動が来るんだが、俺の場合はこの義手に搭載されているブースター代わりのダイナモのおかげで反動なして使用できる。ちなみに、ISの『絶対防御』すら透過するぞ?」

恐らく『電磁発勁』により発生する電気が生体電流であることなどが関係しているのだろうが、詳しく述べ分からぬ。ただ、分かるのはISがどれだけ強化されようと『電磁発勁』はISに対して絶対的な力を持つということ。

「といつても、だれでも使えるわけではないらしい」

「え? そうなのか?」

桂は、自分に電磁発勁を授けてくれた鹿嶋山の老人を思い出していた。

若造。お主は…俗世に未練がないのう。俗世から弾かれたと考えているから儂を見つけられたのかも知れんな。どれ、少し手解きをしてやるわ。

「……あれ？あの爺さん、もしかして仙人？」

「貴方は何を言つてゐるんだ？」

あの時は別になんとも思わなかつたが、冷静に考へると崑崙山に老人がいるのはおかしい。崑崙山に村でもあれば別だが、わざわざあんなところに村を作るわけがない。

「……そういや、崑崙山って仙界への入り口とかいう説があつたな」

となると、あの老人はやはり仙人？落ち着いて考えて見れば、呂尚とか名乗つていた。確かにそれは太公望の本名だつたはず。

「……」

考え込む桂を見つつマドカはふと自身のことを考え始めた。自分は気づいたら『エム』として生かされていた。エンフィールドはある日、自分に与えられた力。

「強いつもりだった」

エンフィールドを使っての『実戦』はツングースカの一件が初めてだった。訓練という名目で使い方や殺し方は分かつていた。実際に、どこからか連れてこられた男をエンフィールドで殺したこともあった。しかし、実際に戦つてみればこのとおり。桂が規格外なのはわかるが、自身の経験が少なかつたことも原因だらう。そう考えると桂たちにいたのは幸運かもしない。

アイザックと桂という『規格外』の存在の近くにいれば、もつと強くなることができる。そうすれば、『H.M』ではなく『マドカ』として存在できる。

「桂…さん」

「へへ… こんなことなら宝具の一つでも貰つておけば……お?」

『電磁発動』といつこの科学技術バンザイな世界で絶対的なアドバントージを持つている技を教えてもらつておきながら、宝具を貰つておけばよかつたと呟く桂。物欲は薄い方ではなかつたのか?

マドカに声をかけられ、振り向ぐが「さん」付けは怖気が立つので呼び捨てで構わないと告げるとマドカはあることを質問した。

私は『普通』になれるのか?

マドカは生まれた時から暗い場所に居た。誰にも知られること無く、自分に命令を下す者はいたが表の顔も持っているであろう奴らは自分とは違う。オータムもスコールも理由はどうあれ表から裏にきた人間、だろう。でも自分は違う。任務で市街地に出ることがあった。その時、親に手を引かれる同年代の子供を見て羨ましく思った。自分にも親が居たのではないか？もし、いたなら自分は何故ここにいるのだろうか？自分は誰にも受け入れてもらうこと無く死ぬのか。

「普通にはなれねえだろう。お前はもつ人を殺しているんだからな」

「そう……だな……」「たゞだゞし」え？」

桂の言葉にうつむいて自分の生まれやこれまでの自分を呪つたが、桂の右手が頭に乗せられ優しい声をかけられた。顔を上げると、そこには桂が優しげな顔で自分を見ていた。

「『幸せ』にはなれるんじゃねえの？それと…『自分』がわからぬいなら俺が認めてやるよ。『高槻マドカ』として、そして俺の相棒としてな」

「桂……」

桂はマドカに少し寝ておけと告げると部屋を出て行った。残されたマドカは知らずのうちに笑っていた。

「…………桂……私を認めてくれた？」

「大将）。俺の得物ができたらしいな」

桂は部屋を出て、屋敷の研究室に顔を出していった。桂が頼んでいた刀が完成したと左腕に通信があったのだ。そして、アイザックから渡されたのは日本刀。

「かなり苦労した。日本の刀鍛冶師の中でも選りすぐりの老人に頼み込んで打つてもらつたからな。ISと打ち合つても刃こぼれはし

ないぞ？」

「へえ……といひで、鞘がないようだけじ？」

日本刀を持って少し振って調子を見ていた桂がふと鞘がどこにもないのに気づいた。話を聞いてみると、鍔のところにERS技術が使用されているらしく鞘は自動的に生成されるらしい。

「……なるほど。斬殺だけではなく撲殺もできると…棘つけね？」

「むしろ、流体金属で作るものもありだつたかもな」

ただ、ビックリドッキリメカ『束博士特製の左腕タケミカヅチ』があるため別にいいかと判断した。

「さて、お前とマドカに任務だ。来月開催される『第1回モン・ド・グロッソ』へ出向く私の護衛だ」

アイザックから渡されたパンフレットにはでかでかと千冬の空を舞う姿が載っていた。

「ふーん…『優勝候補の日本代表織斑千冬』ねえ……」

千冬の簡単な紹介が載っていた。そこには、『実弾系ライフルを持つ相手には苦戦する傾向がある。そこをどうするかがポイント』と書かれていた。

第6話 一人のはみ出し者（後書き）

マドカがちゃんとヤンキーで覚醒？

マドカの出血とかは本編に入る前に設定集を書くつもりなので、そこまで待っていてください。ちなみに、マドカは櫛無（玉櫛）と同じ年の予定。

次回は、千冬メインになると思います。

P.S. シャルはヒロインに確定しました。ただ、下手すりやマドカと同じように病むかも……あれ？ 問題なくね？

12月29日 サイレント・ゼフィールス ホンフィールド、その他
修正

第7話 モンド・グロッソンにて 前

IIS版オリンピックとも言える『モンド・グロッソン』がアメリカで開催された。そしてその会場には来賓客としてIIS委員会や各国の重鎮がやってきていた。その中で異彩を放つ存在が一人。

「あれが…イギリスのハイエナか」

IIS委員会の理事のほとんどが60代という高齢者の中、たった一人30代のアイザック。若くしてその地位についたアイザックには色々後ろ暗い噂がついてまわっていた。

『目的のためならば手段を選ばず、弱みを見せればそこにつけ込み、弱みがなければ作るハイエナのような男』と諸外国では称される。実際、そのとおりなのだがそれを『噂』にまで誤魔化しているのだからアイザックの手腕が分かるところである。

「大将～随分、恨まれてんな？」

「フッ。弱みがなければ作る云々は、それだけ怪しいことをしているからだろう。言つておぐが、弱みを作ると言つてもありもしないスキヤンダルをでっち上げるくらいだぞ？ そこから大騒ぎして実は真実だったと自滅した連中の責任まで取れるかよ」

「カツカツカツ。そりやそうだわな。つーか、後ろ暗い事してないわ
りや付け入られることもないわ」

「……一人とも黒いなあ」

アイザックの左に立つのは黒いハイネックの上にロングコートを羽織り、右手に鞘に入った日本刀　　銘は『壱式斬刀』を担ぎながら笑うサングラスをかけた桂。普通は、このような場にこれ見よがしな武器を持ち込むのはご法度なのだが、ISは待機状態にすればアクセサリーと変わらないため、暗殺には持つてこいの道具なのだ。その警戒のため、IS委員会理事の護衛は牽制のため見えるところに武器を持つものもいた。一応、理由も「IS反動勢力への警戒」などで誤魔化せる。

マドカはメガネをかけて決して派手ではないスーツに身を包み外見はアイザックの秘書とも見える。だが、実際はメガネが待機状態のエンフィールドのため桂と同じくアイザックの護衛である。

「さて… そろそろ試合が始まるな。桂、マドカ。行くぞ」

「う~い

「はい」

周りからの恐怖、または尊敬の視線を受けながらアイザックは観戦ルームへと向かつ。

「ん？ 尊敬の視線つてなんぞ？」

「しらんのか？ 一応、これでもCIAの裏面とせじ飲みする仲なんだが？」

「すまじですね…」

「……あ、もしかしてあのメガネのおっさんか？ いやあ実におもろこホッサンだった」

「やうやう。あのメガネだ。ちなみに、プライベートでは娘を溺愛しているわ~？」

「……（＝＝・）」

ハツハツハツと笑いながらアイザックたちは廊下を進む。マドカはそんな一人を遠い目で見て『いるだけだった』。

モンド・グロッソにおいて優勝候補の一角とされる日本代表織斑千冬専用機である『暮桜』を纏い空に浮かんでいた。

『では、日本代表織斑千冬対アメリカ代表ナターシャ・ファイリスの試合を始めます！』

レフホリーの言葉と共に試合が開始された。この試合は、純粋な実

力をはかる実戦形式の試合。そして、モンド・グロッソの一番の田玉でもある。

「行くわよー!」

「 チツ」

試合開始と共にナターシャはレーザーライフルを千冬に向けて放つ。尤も、それはテレフォンパンチに近いものだったので普通に避けられる。

「 セト…どうするか

千冬の暮桜は、左腕にレーザーガンを取り付けているが真骨頂は主武装である雪片による近接戦闘。つまり、近づかなければ有効打はあたえることができない。普通なら難しい。しかし、千冬は独自にあみ出した『瞬間加速』と名付けた機動がある。それを使えば。

「嘘ー?」

「貰つたぞ」

急加速・急停止を繰り返すことにより相手を攪乱しつつ距離を詰める。この技。この技と自身の剣の腕で千冬はこの地位まで上り詰めた。

「 って、簡単にやられるわけ無いでしょうがー。」

「 ひーーー？」

ナターシャが呼び出したのは『実弾ライフル』。それを千冬に向けると彼女は小さく悲鳴を上げ後ろに飛び退き詰めた距離を再び広げてしまつ。そして、千冬は先程までとは違ひ荒く息を吐いて脂汗も搔いてくる。

「……織斑千冬は実弾ライフルに向かしらのトライウマがある。噂は本当だったのね」

「 なに…を」

以前、桂が読んでいた雑誌にも書かれていたとおり千冬は実弾ライフルを持つ相手には総じて辛勝である。そこから各国エリ操縦者は調べ始めた。そして、その結果千冬は向かしらのトライウマがあることに気づいた。

「理由は分からぬけれど…」しかしも負けるわけにはいかないの。『メンね？』

「ナメ……るな」

それは一瞬だつた。『瞬間加速』で一気に懷に入った千冬は個々のISが発現する単一仕様能力『零落白夜』を発動させ、ナターシャを一刀のもとに斬り伏せた。

「トラウマがあるのは事実だ。だが…それで私は止まつてはいけないんだ。証明しなければならないのだ…アイツが…桂が腕を代償に助けた私はこれだけの価値があるのだと」

対象のエネルギーを全て消滅させる『零落白夜』は『電磁発勁』とはまた違つ意味でISに対して絶対的能力を持つ。それをどう扱つかが千冬が勝利する条件。

そして、千冬は負けるわけにはいかない。『織斑千冬』という存在は桂が腕を犠牲にして守つただけの価値があるのだと証明しなければならないから。

「先輩！ サスがです！」

「山田君、か。すまない…少し一人にしてくれ」

千冬は一人口ツカールームに籠つた。千冬のサポートをしていた山田真耶は目をぱちくりさせながらロツカールームの入り口を見ていた。しかし、すすり泣く声が聞こてきたため一気に混乱していた。

「『めんなさい…』『めんなさい』

誰かに謝る声。真耶は一瞬ロツカールームにはいらつかと考えたが、頭を振ると静かにその場を離れた。

「私が…馬鹿だつたから」

千冬は自分の体を抱きしめながら桂へと懺悔する。自分が、自分たちが後さき考えずに世界を変えたから。

目を閉じれば『あの時』の事が鮮明に浮かぶ。目の前に飛んできた腕。ナイフを首に突き立てられ壁を染めるほどの血を吹出す男。そして、床にたまつた血の海に崩れ落ちる桂。そして、入ってきたのは桂の知り合いと思わしき男たち。桂の容態を知ることすら無く千冬は警察へと連れて行かれた。数時間後には、一夏も連れてこられた。そして、知ったのは自分たちがとても危うい場所にいるということ。

だから、力を求めた。一夏と自分を守れるだけの力を。しかし、強くなればなるほど一夏とは離れ、そして『あの時』の事が頭の片隅から離れない。多分、これは罪。自分への罰。桂が現在どうしているのかは知らない。会って謝りたい。でも、それはできない。自分のいる立場が、そしてなにより自分が許さない。だから、ずっとこの罪を背負つていかなければならない。

「……織斑千冬は……私と同じ顔？　え？　じゃあ……私は……？」

「桂」

「あいよー」

千冬の試合を感染していた桂たち。しかし、途中からマドカの様子がおかしくなった。ふらふらと部屋を出て行った。桂がその後を追

つていったので大事には至らないだろつ。

「（まあ、桂がどれだけ『依存』させるかで今後が決まるな）」

アイザックはマドカの事を評価はしているが、これで桂が『依存』させるまでマドカを手中に取めることが出来れば今後の命令もしやすくなる。

「（だが……色々とありそうだな）」

マドカと千冬の顔が瓜二つののはアイザックも気づいていた。恐らく、そこには自分が知らない何かがある。

第7話 モンド・グロッソにて 前（後書き）

千冬さんは、実弾ライフル銃にトラウマ持ちです。勝ちますが、その後数時間は戦えない。このトラウマは桂が上手く立ち回れば克服しますが……無理でしょう。

次は、マドカになりますね。その後は、少し時間が飛んで一夏誘拐事件のあたりになるかも。

指摘を受けまして、サイレント・ゼフィルスからHンフィールドにIS名称が変わりました。でも、原作に近くなるとサイレント・ゼフィルスになると思います。

ところで、自分が書いているISのHn「これが私のお兄様」「三匹が行く」「とあるはみ出し者の物語」のオリキャラたちを一箇所に集めてみた短編を書いてみたのですが……はつきり言って世界征服できるレベルになりました（＝；）

第8話 モンド・グロッソにて 後

あの女は何だ？ 何故、私と同じ顔をしている？ いや、年齢を考えれば私『が』あの女に似ているのか？ ジャア、私は何？ 双子の妹？ それにしては年が離れている。だが、年が離れていてもそつくりな姉妹はいる。でも、姉妹 弟がいるから姉弟か？ なら何故自分だけ『あんな世界』にいた？

「……」

考えても答えはでない。それどころか考えれば考えるほどに『自分が』が弾かれたように思える。

「ああ……私が『あんな世界』にいたのはあいつらのせいか……」

「……ズゾゾゾ」

自分でも理解出来ないほどに黒い感情に支配されようとしていたマドカを正気に戻したのは、この場に不釣合いにもほどがある麵を啜る音。

「え……桂？」

振り向くとそこにはカップ麺を思い切り啜つて居た。ちなみに、醤油味。

「何事がと思ったら『そんなことか』」

「……そんなこと!? だって、私は『お前は『高槻マドカ』だ』う?」「え」

「い、じゃないの。お前は『高槻マドカ』だろ?」

桂は左腕をバーナーに変形させカップ麺の容器を焼却するとマドカに笑いかけた。

「俺としては、お前と離れたくないな」

それは桂の本心。マドカを手放したくないため、マドカを引きつけようとする。普段の言動で勘違いされる事が多いが、桂はアイザックと同じく『目的のためならば手段は選ばない結果主義者』である。そして、『更識』内部の空気を察知して独自のコネを作った事や生活のために裏路地を支配していた事からも分かるように冷静に理論的に行動することが多い。故に『マドカという結果』を手に入れる

ために右手を再び差し出す。

「もしも前が千冬たちのところに行きたいといつなら… アイザックに頼むわ。わあ…どうする？」

この手を取るなら自分が『高槻マドカ』として受け入れる。しかし、取らないのならば『織斑マドカ』として生きていくようにする。桂の目はそう物語っている。手を取らなければ桂は本当にアイザックに掛けあってくれるのだろう。

だが、考える。自分はすでに何人も殺している。それに、今更出ていつたところで自分を受け入れてくれるか？　そこまで人間は優しいものか？

マドカが今まで居た『世界』は悪い意味で人間の本質が分かる場所だった。だから千冬が素直に自分を受け入れてくれるわけがないとマドカは思った。千冬の人となりなど分からぬ。でも、恋人であるスコール以外を見下していたオータムや、男嫌いなのかは知らないが男というだけで嫌悪し、なにか頼む場合も見下して『命令』するスコールを見ていると千冬も同類のように思える。マドカが見てきた『女』はそのような連中ばかりだった。

「……私は……『高槻マドカ』……だ」

もちろん、そんな人間ばかりでないのはアイザックの屋敷や実家にいるメイドなどで分かつていて。しかし、彼女たちは『IS』とは関係ないため、マドカは『ISに関係する人間』スコールやオータムのような人間』という考えを持つてしまった。

だから、マドカは桂の手をとった。別に捨てられていてもいい。自分には自分を受け入れてくれる人がいる。それだけで十分だった。

「ま、寂しいとかあつたら俺に言え……何とかしてやるよ」

マドカを落ち着かせるように抱き寄せ、背中をとする桂。マドカが見上げた桂の顔は自分を安心させるかのように微かに笑っていた。

「（まあ、戸籍がないことなどを考へると下手すりや赤子の頃から『ひから側』だったから精神的に弱いのも分かるが……）

だが、これはこれで構わない。恐るべくこれでマドカの根幹は揺らぐことはないはず。

「（本来なら千冬もフォローすべきなんだろうが……）

千冬が『あの事件』で左腕をライフル銃で失った自分に対しても負い目を感じ、そのせいでトラウマを持っているのは先程の試合や前評

判で大体察する」ことができた。

トライウマを克服させるためには桂が出張つたほうが多いのだらうが、桂にそんな気はない。

「（住んでいた世界が違つからな）」

千冬には知り合ひもたくさんいるはず。自分がしなくとも誰かがフオローするだらう。

「そんじや、大将のところに帰るぞ」

「うそ」

腕を絡めてきたマドカの頭を撫でながらアイザックのもとへと進む桂。千冬へのフォローは自分からする気はない。千冬には悪いが、これも自業自得と思つてもらつしかない。

マドカは桂の腕に抱きつきながら笑っていた。

「（そうだ。私には血の繋がつた姉や弟はいらない。桂がいてくれるから）」

それに本当に血が繋がっているとも限らない。もしかしたら、顔を似せただけの別人かもしれない。冷静に考えればそっちの方が説得力がある。

「（織斑千冬とは幼馴染みと聞いた。でも…『今』桂の横にいるのは私だ）」

桂の横で『パートナー』として隣にいるのは自分。それに、桂から聞いた話では桂の『邪魔』をしたらしい。それだけが原因ではないのだろうが、桂は千冬をあまり心良くなは思っていない。

「（桂の邪魔をするなんて……）」

それに、もうあの女が桂の邪魔をすることはないはず。そう思えば、以前のあの女の邪魔も許せる。マドカはクスクスと静かに笑っていた。

た。

「さて… 戻るか」

「ん？ 試合観ていかないのか？」

「総合優勝は日本代表だ。それに…仕事が入った」

「……了解。マドカ、行くぞ」

「うん」

観戦室に着くと丁度アイザックが部屋を出てきた所だった。モンド・グロツソの全日程も終了し、この後表彰式らしいがアイザックは千冬が優勝すると判断し、本国に帰国することに決めた。そして、何より『仕事』が入ったのだ。

「桂、本国に戻り次第マドカと一緒にこの男を移送してもらつ

アイザックが見せた写真。そこには一人の男が写っていた。

「あれ？ 先月捕まつたイタリアマフィアの弟くんじゃん」

[写真に写っている男は、先月些細ないざいざで捕まつたマフィアのボスの弟。その男をイタリアに連れていくのだが、組織の妨害があると思われるため、複数の替え玉を用意してそれぞれ空路や陸路などを使って組織の妨害を防ぐらしい。そして、桂とマドカには本命の男の護送が回ってきたのだ。

「……なんか、裏かかれそうな気がする」

「とうより、フラグにしか聞こえねえ」

「まあ、政府からの命令だからな。分かっていてもどうにもできん」

アイザックとしては、EISを2機程度使って弟をコンテナにでも入れて空輸したほうがいいと思うのだが、政府からの許可がありなかつた。

「とりあえず、政府から鉄道を使えと言われている」

「鉄道事故フラグですねわかります」

「桂：縁起でもないよ」

背中に背負っていた刀を右手で担ぐとアイザックの左隣に桂。その隣にマドカといういつものポジションで三人は去っていった。

「兄さん……なんで……」

そして、それを見ていたのは次期『更識楯無』として動いていた玉櫛。彼女は兄の姿を見て安心してた。誰かの部下になつてるのは予想していた。しかし。

「なに……あの女」

兄の隣に立つて、兄に笑いかけてもらっているあの女は？

「……調べないと」

ここに任務を放棄すれば『更識』を掌握することができない。口惜しいがここは退く。だが、『更識』を掌握することができれば。

「待つって……兄さん」

兄が戻つてくれる。玉櫛はそう決意し、去つていく三人の人影を見据えていた。

第8話 モンド・グロッソンにて 後（後書き）

……あれ？ なんか、ヤンデレが増えたような気がする

ちなみに、桂は本気で千冬のフォローを自分からするつもりはないです。アイザックとかから命令されるか、そうしたほうが動きやすいと判断した際にフォローすると思います。

そして、次回はセシリアに関わっていくイベントですね。まあ、原作崩壊になる可能性がありますね。つーか、なるなこれ。

他の小説については、書を進めてこるのでじっくりだぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4017z/>

IS～インフィニット・ストラatos～とあるはみ出し者の物語

2012年1月1日21時19分発行